

# ニホンミツバチの分蜂

竹川 大介

「ホテルに住む美しい川を守ろう」  
「ホテル祭り開催中」なんていう看板を、道沿いときどき見る。いいことだと思ふ。私も虫を見るのは好きだ。梅雨のあいまの夕刻の水辺で、淡い光を点滅させながら、ふわりふわりと飛ぶ求愛の様は、世俗を忘れ、なにやら幽玄な気持ちにしてくれる。

でも、そんなとき、ちよつと斜に構えてしまう、もうひとりの虫好きの私がいる。

もし、そのホテルが、光る虫でなければどうだろう。あの貧弱な甲虫に興味を示す人が、いったいどのくらいいるだろうか。年に一度、ほんのわずかな期間だけ、水辺の夕刻に飛び交う小さな虫のことなんて、ごく一部の研究者かよほど特殊なマニアを除けば、たぶん、だれも関心をもたないはずだ。だから、たとえば「ヨツボシケンキスイを守ろう」なんて運動は、どうしたって無理だろうな、なんて、よけいな妄想をしてしまうのだ。人間にとって、とりたてて害にも益にもならないコモン種のヨツボシケンキスイを知らずに、一生を終える一般の方々は、世間にたくさんいるはずだ。

あるいは、たとえそれがニホンアミカモドキのように、希少な上に、成虫は数時間ほどしか生きられない短命種でも、たまたまその生態が、人間の生活圏に近づくにつれて、関心が高まる。たとえば、テレビドラマの中で蟬の鳴き声が聞こえると、夏の始めなのか終わりのなのか、昼間か夕方か、さらに舞台が日本のどこなのかが、気になって仕方ない。大阪の町中のシーンでミンミンゼミが鳴いていると、とてもがっかりな気持ちになる。夏休みの初めのツクツクホウシも絶対やめてほしい。時代考証や方言指導と同じように昆虫指導が必要である。

レアな昆虫だったとしても、とくに人の目をひく特徴でもなければ、「ニホンアミカモドキ祭り」は、あまりに地味すぎて盛り上がり欠ける。

実際に、多くの虫たちは、私たちの関心がまったくとどかない世界で、生まれ、育ち、交わり、命をつなぎながら四季を生きている。ホテルのようにお尻が光るくらいの芸をしてくれれば、お祭りだつてあげられるが、そうでなければまったく無関心。だから虫の看板を見るたびに、かえって人間の身勝手さを感じてしまうのだ。

天文学というのは星や月や太陽の規則正しい運行を利用した暦作りから始まった学問であるが、同じように自然環境の変遷や年周期の正確な指標として、身近な地域環境と結びついた昆虫暦のカレンダーが、普通に手に入ればよいのにと思う。

たとえば、テレビドラマの中で蟬の鳴き声が聞こえると、夏の始めなのか終わりのなのか、昼間か夕方か、さらに舞台が日本のどこなのかが、気になって仕方ない。大阪の町中のシーンでミンミンゼミが鳴いていると、とてもがっかりな気持ちになる。夏休みの初めのツクツクホウシも絶対やめてほしい。時代考証や方言指導と同じように昆虫指導が必要である。

なにはともあれ、多様な環境の隙間をお互いに譲りあいながら、けなげに生きている昆虫たちは、普段はひっそり暮らしているが、限られた時間に、限られた場所だけに突然現れる、ふしぎな習性をもっている。

そして、ニホンミツバチを飼っている私にとって大イベントといえるのは、なんととっても春の巣わかれだ。ずいぶん前ふりが長かったが、そんなわけで、今回のお話はミツバチの分蜂である。

ソメイヨシノが散る頃になると、ニホンミツバチを飼っている趣味人たちは、みなそわそわ落ち着かなくなる。風のない穏やかな春の晴天の昼間、新しい女王が誕生すると、群れの一部が分裂し、もといいた女王とともに一斉に巣から飛び出す。

これを分蜂という。一年を通して、もっぱら花粉や蜜を集め、巣箱の中で穏やかに子を育てているかわいミツバチたちが、これほど激変する瞬間はない。

巣箱を出た蜂群は、手近な木の枝などに再集結し、ドッジボール大の蜂球を作つてぶら下がる。大量のハチがあたりいちめん興奮して飛び回る様子もただ事ではないが、その直後に、女王蜂がだすフェロモンの力で再集合し、

静まりかえって整列する姿にも、なかなか神祕を感じる。

よく「ハチが突然やってきて、巣を作り始めている」と通報され、駆除の対象となるのが、こんな時である。でも正確にはこれは巣作りではない。そのままほっておけば、いずれハチたちはどこかに飛んでいく。しかも女王のフェロモンに統制され、きわめておとなしい。ミツバチを顔にとまらせてお口髭にして、自撮りして、友達に自慢するならばチャンスだ。

おなかにハチミツをためたミツバチたちは、長いときには3日も4日もそのままじつとぶら下がっている。いったい、なにをしているのだろうか。

じつは、ここで「ミツバチ会議」が開かれている。静かにかたまっているハチたちとは別に、しきりにどこかに行き来しているハチがいる。これが探索蜂だ。この探索蜂が、移転先にもさわしい場所を探し、仲間たちに情報をつたえているのだ。そしてその情報を元に、ベストな物件選びの検討会議が続く。

ダンスを交えておこなわれる会議は、わずか数十分で結論がでるときもあれば、なかなか決まらないときもある。どうやって知るか知らないが、ミツバチには天気予報の能力もある。

晴天が続けば時間をかけて、天気が悪くなりそうならば、雨が降る前に決断がくだされる。

それにしても、新しい転居先にもさわしい物件のサイズや環境を、探索蜂たちは、どうやって知り、さらにはかのハチに伝えるのだろうか。いっけん静かな蜂球の中で、どんな会議が展開されているのか、考えれば考えるほど不思議に満ちている。

ちまたの蜂飼人は、それぞれさまざまな独自の仮説をうちたてて、ミツバチ会議の成り行きを推測する。ぜひとも用意した巣箱に入つてほしい。むしろ、女王ごと蜂球を網で捕まえて、むりやり巣箱に入れてしまうこともできるが、ハチたちが自分で選んだ方が定着率が高いようだ。それに、探求心が旺盛な蜂飼人にとって、ミツバチ会議の巣箱選びは、ちよつとしたギャンブルのような楽しみでもある。

ミツバチの動きをつぶさに観察し、好みを理解し、ミツバチの気持ちになつてベストな物件をご提案する。ほかの巣箱と離しておいたり、入り口の向きを変えてみたり、中に蜜嚙を塗つてみたり、墨汁で巣箱を黒くしてみたり、探索蜂の気を引く仕掛けをいろいろ試すのだ。

ミツバチ会議の合意形成のプロセ

スは、人間の脳の神経系の働きと似ているともいわれている。意見が分かれたときに、有力な候補は、別候補の情報伝達を抑制し、ある一定の臨界を超えると一気に全体の決断が下される。ものの数分もしないうちに、ハチたちはあたらしい巣箱に向かって一斉に飛び立つのだ。

どんなに周到に準備しても、期待していた巣箱に入らず、森の奥に逃げていくこともある。群れの行き先を目で追いつながら「そうかあ、団地よりも森か、ミツバチも人間と一緒だね」とつぶやく。そんな時の蜂飼人の目は、どこか優しいのである。

そんなこんなでミツバチ暮らしの一年は始まる。



## 竹川 大介

(たけかわ だいすけ) 理学博士。専門は海洋民族学、人類進化論、人の環境適応。1996年より北九州市立大学で人類学を教え、九州フィールドワーク研究会(野研)を主宰。2012年より大学内でニホンミツバチを飼う。

「放課後みつばち倶楽部」  
http://beebee-club.blogspot.jp/

写真：乱舞するミツバチ